

内蒙古の大草原 (ナレーション) ▶ 涯しなく広がる草原と砂漠の地、内蒙古地帯。

江上先生は「多様な風土と文化と歴史を有するアジアとは何か」という問題意識をもって、この地を歩き続けました。

江上先生の処女論文「考古学上より観たる遊牧民と農耕民」はここでの第一回の調査を基に書かれました。

▶ 蒙古の大草原は江上先生の〈問題意識〉に対していくつかの成果をもたらしました。その一つは生涯に亘る研究テーマ「農耕と牧畜の起源」です。このテーマは戦後、江上先生が行なっている西アジアの調査と深く結びついていくのです。

(江上先生トーク)

(その頃の先生の調査研究のテーマといいますと、どのようなことだったんでしょう)

私たち、私の調査テーマはですね、最初はその蒙古の新石器時代で、ことに細石器文化というものに非常に興味をもって、なぜあの様な小さな石器ばかりの遺跡が、蒙古全体に広がっているのか、それが問題だった。それが、ずーと西の方まで連なって、ユーラシアの内部に広くあると。で、特にそこで注意したのは奥地に行けば行くほど、その細石器ばかりで、そこには狩猟用の石器もなければ農耕用の石器もないと。これはどういう訳だろうということで、要するにその細石器というものは狩猟の用具ではなくて、そしてこれは、もちろん、農耕用でもないんで、これは家畜をもった人たちが家畜の処理に使ったその特殊な石器のほかは考えられないと。そうすると、中央アジアの牧畜の起源というものは、もともとそこで、農耕をやった人、あるいは狩猟やった人が、そこにいる動物を飼い慣らす様になって、そして牧畜が始まったというのではなくて、やはり、農耕・牧畜で生活が成り立っているものが、その牧畜のものを、何らかの形で放牧地帯や草原地帯に行ったために出来たんじゃないかと、ま、そういう解釈が出来るんじゃないかという見通しをもって、調査するようになったのです。

(そうすると、牧畜、或いは遊牧民の起源というようなテーマでしょうか)

そうですね、その関係の西アジアの農耕、牧畜の起源の問題をやって、その流れがこっちへ入ってきたと。(戦後そういう調査に携わるようになるという) そのために一番最初に「歴史学研究」という雑誌を我々が歴史学研究会を作っ

てやったときに、一番最初書いたのは、農耕牧畜の起源に関する論文を書いた。それが、私の処女論文なんで、大体、その時にそういう見通しを書いておいたんです。けども、それに対して、彩文土器はやっぱり西から来たんで、南の方の農耕地帯にはずーっと彩文土器がきてると。これはやはり、そういう農耕、穀物の農耕というものは西に始まって、東に及んだんじゃないかと。そういう牧畜の場合も同じ様に西アジアに起ったものが東の方までそういう草原地帯に広がって、そこへ来れば牧畜だけでやっていけるという、そういう生活形態ができたんじゃないかと考えてたんです。

戦後にそれを続けて、一つはやっているわけで、しかし、もう一つはですね。大学時代からやった匈奴の文化というのは、匈奴が興った、中国でいえば戦国、それから漢の初めは、匈奴の初期、初期といいますか、もう初期といいながらその時が一番最盛期なんで、その最盛期は青銅器時代で、所謂オールド青銅器文化というのはその時に行われておったんですが、それが今度は、この中国が漢の前漢の時代に出てきて、そして匈奴を逆に討伐するようになって、それがあの、中国自身がやっぱり北方の匈奴、或いはその基になったスキタイの文化を入れて負けないだけの騎馬戦をやれる様になったということ、もう一つは丁度その頃、気候変化がありまして、あの中央アジア、或いはユーラシアの内部全体が非常に旱魃があったり、大雪がふったり、家畜が非常に減ったような状況があって、その為に負けちゃったんですね。で、負けたもんですから結局、講和して匈奴の方が弟みたいになって、中国の方が兄貴になって、ま、しばらく平和時代が続くんです。

(それからあの、先生の調査の話も、もうちょっと詳しくおききしたいんですけども、ロバとか馬とかを利用される訳ですか)

そうですね、中国だったら、大体ロバです。で、あの、中国は、割に山のけわしい所がある。山のけわしい所はロバなら安全なんですよ。断崖なんかある所をね、初めはこわいと思ったんですけども絶対、大丈夫ですね。だから、まあ安心して乗る。ロバに乗って、チョン、チョン、チョン、チョンとこう行けるし。それから、蒙古はやっぱり草原ですから、普通の時は馬にかぎるんで。それでまた、駅伝があった時代ですから2時間位ずつ、行って駅へ行くとお茶を飲ましてくれて、その間に新しい馬を用意してくれる。それに乗っていく訳ですね。そうすると、又、駅に着く。それは案内してくれる奴が必ずいますから。ですから、どこそこの村へ、これから行くと、いうと、ついてきてくれる。

(その当時、治安は如何でしたか)

治安はもう、蒙古に入ったら、これは絶対安全なんです。これは面白いですね、蒙古に入るまではね、いちばん匪賊地帯なんで。馬賊がいるんですよ。そこで、蒙古からいろんな羊の毛皮だとか、或いは塩とか、そういうのを持ってくるやつを狙ってるわけですよ、山の上から。そして、まあ掠奪して、場合によっては金持ってるんだったら、金もとるということをするんですが、入ってしまうとね、全然、兵隊ももうろくにいません。もちろん、警察も何もない。蒙古人地帯になると絶対安全なんで。蒙古人自身はラマ教で悪い事しないし、それからしようにも無いんですね、皆、同じ生活をやってんですから。で、すぐ噂がとんじゃってね。皆、馬で遊んで歩いて情報が楽しみで、それで歩きますから。我々が入ったといたら、とたんにもう広がっちゃう訳です。こういう日本人が入ってきたという。だけど絶対に危害は加えないし、どこへ行っても必ず歓迎してくれるし。入る直前が一番危ない訳ですね、そう、直前が危ない。

(かなり危ない目に会われたことはありましたか)

馬賊が出てきたことが3回ありましたよ。けども、幸いにして馬賊が出た為にかえってほかの人が護衛兵を連れてたりね、それと合流が出来たり。それと、偶々昨日、出たから、今日は行かないとトラックが言ったときにどうしても行きたいといって無理に乗ったら、やっぱり出てきたんですよ。出てきて、2人、斥候みたいなやつがピストルをもって、背中に大きな銃を持ったやつがね。あ、これはいよいよやられるかと思ったですよ。そしたら、私の横で病氣みたいな人が、兵隊がいてね、急に、ひょっと立って、両手にピストル持ってるんですよ、それを向うに向けたんですね。そしたら、向うは、こいつは手強いと思ったらしく、引き揚げていったんですね。それは後で聞いたら士官学校の先生だったんですよ。それが病気で故郷へ帰る途中だったんですね。そういう運がいいことがあってね、本当にやられたことはないんですけど、出会ったのは3回あるんです。

(出会ったというのは遠くの方から見たという)

その時なんか10メートル位のところに來たんですけどね。その後の調査のときも、ほとんど、みんな無事で病氣もしないし、その代わり、事故は何度も起こってるんですね。けれども、ちっとも、こっちに直接な影響を何も与えてないね。オロンスムの時でも、ノモンハン事件が起こって直径にすれば2～300kmのところで、ドンパチやってたわけですね、その時。それを何も知らないんで、こっちはね。ただ迎えにくるべき軍のトラックが来ない。そして、飯が食えなくなったということがあったんですけど。しかし、まあ幸いにして、河があったりね、

鷺がいたりして、それを捕って食っていてですね。

(何を食べたんですか)

鷺。鷺はね、鉄砲を持っていくとね、あの辺まで行っても飛ばないですよ。鷺というやつは図々しいってよりもね、王者なんだな、あれは。だから、すぐ撃てるんですよ。そして、ここの肉が美味しいですよ。(翼のつけ根ですね)あとは固いけど、ここだけは固くなくて美味しいですね。それを捕ったり。それから魚がいっぱいいて、その魚を捕って生きてきた。半月以上、20日間位、何も食糧がなくなって、そんなことをやっていたんこともあります。

〈映像〉

地図

オロンスム

自筆の地図

7. 「オロンスム」での発見

(ナレーション) ▶昭和14年、江上先生は内蒙古と外蒙古の国境に近いオロンスムの調査で大きな発見をしました。

それは東西文化交渉史上、重要な意義を持つものでした。

このオロンスムにある元の時代の城址を調査していた江上先生は東アジアで最初に建てられたローマ教会堂の遺跡を発見したのです。

▶13世紀末、ローマの伝道師モンテ・コルヴィノは蒙古・オングート部族のゲオルギス王をカトリック教徒に改宗させました。そのゲオルギス王の寄進によって建立されたローマ教会堂のことはローマ法王庁へモンテ・コルヴィノが書簡で報告していました。

江上先生が発見したのは長い間、行方が知れなかったそのローマ教会堂の遺跡でした。

▶しかし、この発見が江上先生の学者としての人生の上で、特別大きな意義を持つようになったのは戦後になってからなのです。

(江上先生トーク)

(内蒙古のオロンスムの遺跡の調査についてちょっとお話しを)

蒙古でジンギス汗が興ったときに、オングートという部族の氏長だったアラクシ・テギン・クリというのが彼を非常に助けて、そして蒙古の統一も、その力によって出来たわけですね。マルコ・ポーロの中にもある様にオングートの王様の王家の人達、長男たちはですね、必ず元の王室から娘さんをもっている。そういう、所謂、元朝の、ま、附馬といいますか、その附馬の家というの

があった。特別、非常に尊重されたものであって、で、ある意味ではその、オングート即ち、オングッティという蒙古族とは違った民族と蒙古族とを、所謂、その世界帝国というのはその合作に始まるんじゃないかと、そういうことも考えられなくもない、というようなことがありましてね。フビライ汗の時のオングートの王様がゲオルギスといい、そのときにローマの法王庁からその、ま、大使、外交使節、兼、伝達師として、派遣されたモンテ・コルヴィノというのが、そのゲオルギス王の所へ行って、そこでローマ教会というのを作った。で、その王様がネストリアンであったんだけど、その、モンテ・コルヴィノによって、カトリックへ改宗してそういう教会を作ったということが、ローマ法王の方へ伝えられた。彼の手紙によって、確められた。ま、そんな様な、非常に重要な一族でありながら、出自も、民族も判らないという、不思議な民族といえますか、としてこれは存在したのですね。それが、そのオロンスムに、少なくともゲオルギスの時代には居て、そして、フビライを助けて、この西方、西北方の同じ蒙古族で、これに敵対していた海都^{ハイドゥ}やなんかと戦って、非常にまあ、勲功があったけれども、敵中に捕えられて、自害した。ま、そういう人でもあるということも、中国の歴史では判る、又、判っていた。で、それがその、オロンスムが、その根拠であったというのが判ったのがですね、西北科学考察団というスウェーデンと中国との合作したこの中央アジア調査団で、中国に黄文弼という人がいまして、この人はご承知の通り、のちにトルファンやなんかの調査で有名になった人なんですけれども、それが行ってですね、元の時代の碑文があるということを、オロンスムということにあるということを、帰ってきてから簡単に報告してるんです。

私は、馬札罕の子、八都帖木児というのはこれは、あの元のオングートですね、あれを見ますと馬札罕というのが出てくるんで八都帖木児は出てこないけれども馬札罕というのが出てくるということから、そこに都を作ったとすればオングート以外にないだろうと。だからオングートだろうと思った。そして、行ってみますと、宋、元の焼物なんかいっぱいありましたね。それから、外城と内城とがあって、内城の宮殿は三つ、こう並んでましてね。縦に並んで、南北に並んで、それでそれは少し丘になっていて、試掘すると木造の建物で、屋根は、中国風の宮殿式の黄色い、緑とかそういう屋根でね。それから今度は高い所から見ますとね、草の色が違ってね、城堡の穴がちゃんと見える。そしてその一角にかなり大きな建物があって、そこに黄文弼の見た碑文があった。誰か持ち出そうとしたらしくてね、三つ位、こう別れてましたけどね。とにかく、かなり読めた。そこが、その何の屋敷跡かという、元朝から女の人が嫁に娘が嫁にいったときに、くっついてく者を王傳^{ワフン}といって、くっついていきました。そうすると一種の顧問になるわけね、政治顧問に。その屋敷なんぞね。それをその政治顧問がそこに住んだ時に建てた家で、ここは元朝以来、こういう名家であって、各代、各代、嫁がここへ来たということがずっと書いてあるです。

ですから、最後のころになって行った人なんですね。それからもう一つ、今度は、城の外には、立派な、その石人・石獣・石碑が立っていたと思われる亀趺のあるお墓がある。これはまさに間違いなく、オングートのゲオルギス王のお墓に違いない。というのは、他の人は皆なそのネストリアンの墓なんですけれども、その人だけは、さっきもちょっと申しました様に戦争中に死んで、自殺したために子どもが遺骸を求めて元朝を通して交渉して、その遺骸を返してもらった。そして元朝が、そういう非常に元のために働いた人だということで、中国風のお墓を作ったということが記録にある訳ですね。ですから、それでもって、そこがそうだという事が判った訳です。そして、そんなら、最後に私が問題にしたのは、そこに最初のローマ法王庁が作った遺跡があるかどうかという、教会の跡がね。それはやっぱりね、東北の、城の東北に、大きな建物がありましてね、それが、そうだったんですね。というのは、そこの壁を飾ったゴシック模様のレンガがある。落ちてたんですね。で、私はそれをこれはゴシックだなと思って。そして、そこには建物がある。ほかはみんな東向き、東南向きに建っているのに、そこの建物だけは西向きなんですね。そして、小さな入口があって、そこに小さな建物があって、本体がこっちにあるわけですね、教会の大きなやつが。この小さいのが何で在るのか判らなかった。これは後で判ったんですが、カトリックの建築家に調べてもらったら、当時、まだ、本当に信者にならないもので、くる人がそこへ入る所で、本当に信者になると大きな方へ入るようになる。そういうのが実はあるんだそうです。だからそれだということが判って、要するにモンテ・コルヴィノが自分一人で行って、彼の指図でそういうゴシックの家を建てたということになるから、それは、だからキリスト教の東亜における最初の、その、大僧正、アーチビショップが作ったということであって、最初の西洋建築でもあるということになる訳です。これは大変、まあ、あまり手を付けられていなかった。それで探したら、やっぱり、聖者の像みたいなものとかいろいろあるし、ネストリアンの寺院も別にあって、そこもレンガが、ややペルシャ風のもので出てきて、ま、いろんなことで、これは大変なことになった。最初に先ず輔仁大学^{ホジン}の陳垣^{チンエン}さんなんかには報告して、そこを通して、戦争中に私が、オングートの都を発見したと、そしてゴシックのローマ教会も見付かったと、ということが伝わったのです。しかし、そうなってはっきりしたことは、オングートというのはトルコ族であると、そして、あのトルコ語を喋っていると。それから、ウィグルの方はウィグルのネストリアンとしてのあれがある訳ですね。西夏とか遼で、ここはですね北京に遼の時代からあった。そのネストリアンの教区に属してたというようなことですね。ですから、ネストリアンの系統が一つあって、要するにそのネストリアンのオングートはもともと、中国のネストリアンと関係が深くて、蒙古が興った時も蒙古に忠誠を示してたんで出てきたんだと。しかし、何ととってもトルコ族であるということが、蒙古のジンギス汗の西方に行くときにトルファンなどが、こ